

Title	看護師にとって老衰死とはどのようなものか : 「祝い熨斗の菓子箱」 看護師Bさんの語りから
Author(s)	前原, なおみ
Citation	臨床哲学. 2018, 19, p. 111-127
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68167">https://hdl.handle.net/11094/68167</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 看護師にとって老衰死とはどのようなものか —「祝い熨斗の菓子箱」 看護師 B さんの語りから

前原なおみ

### はじめに

看護師にとって老衰死はどのようなものか。

わたしは、老衰死<sup>1</sup>された方を看取ら<sup>2</sup>せていただいた経験がある。また、同じくらい老衰死でない方を看取らせていただいた経験がある。そのような体験から老衰による生と死は「表」と「裏」のようなものではなく、まるで飛行機が静かに着陸していくような体験であることを知り、老衰死への関心が高まった。

本論文は、老衰死の見取りを支援した一人の看護師の体験をインタビューで現場から掘り起こし、その看護師にとって老衰死の支援がどのようなものであったか描きだしていくものである。前号（前原 2016）では、看護師 A さんに老衰死の体験を語っていただき、A さんにとって老衰死がどのようなものであるかについて描きだした。看護師はすべてのひとを対象とし、その健康に関与する職業であり、看護活動は人々の生活に密着して行われる。それは看護師が「生」と「死」にも積極的に関わることを意味している。患者の想いや治療に関する内容は、様々な方法でこれまでも語られてきた。しかし、看護師は援助職であることから、看護師自身の気持ちや感情が語られることは少なく、特に死をどのように体験しているかについて語る機会を得ることは少ない。そこで患者の傍に寄り添い、科学的かつ感情的な曖昧さをもって患者に寄り添う存在である看護師が、老衰死をどのように体験しているか知ることを目的に、老衰死について意図的に質問し掘り起こしていく。

なお、本研究では倫理的配慮として、平成 27 年度大阪大学研究倫理審査委員会で審査を受け承認を得ている（承認番号「H28-文1」）。インタビューの手続きとして、B さんに研究の目的と方法、プライバシーの保護について説明し、自由な選択の保障と同意撤回が可能であること、個人情報の取り扱い等について書面を用いて説明した上で、署名により研究参加の同意を確認した。

## 1. 老衰死はどのようなものかを知る手がかりとして

Bさんは、看護師歴40年を超える女性である。快活に笑い、人を巻き込む話し方が印象的で、傍にいとするとその内側からあふれ出るエネルギーが伝わってくるようである。1995年に起きた阪神淡路大震災をきっかけに、病院勤務から在宅医療に携わることとなり、現在も在宅を訪問しながら在宅医療に尽力されている。インタビュー前に自己紹介をお願いしたところ、「患者との関わりから、生物としての仕組みがわかって、消えていくのちをサポートしたいと思った。震災で看護師として体験したことは、日常が分断されることでの障がいを目の当たりにしたこと。暮らしの中に健康がある。健康を取り戻すのは日常を整えることだから、最後まで生きるための看護をしていきたい」と話して下さった。

Bさんは、40年の以上の看護師経験から全体を捉えることのできる中堅レベル以上<sup>3</sup>の看護師で、老衰死の看取りを複数回支援しており、かつ現場で起こっている現象を記憶して言語化することが可能で、本研究の趣旨を理解して同意が得られたことからインタビューを依頼した。インタビューは2016年8月に、プライバシーの確保できる場所で2回行い、インタビュー時間は40分と35分であった。1回目のインタビューでは、老衰死した人を看取った体験について自由に語ってもらい、その体験で感じたり考えたりしたことを具体的に引き出せるように進めた。また、2回目は1回目のインタビューからキーワードを拾い上げ、そのキーワードについて自由に語ってもらう方法で行った。

看護師は、病いや障がいを生きる患者と生と死を共有しながら、その生活に立ち会う。しかし、村上(2013)は、「同じ現象に立ち会っても、看護師一人ひとりの体験は異なって認識される」とし、「経験と行為は、過去と集団に由来する習慣性のなかで準備されつつも、その都度取り換えがきかない個別的なものとして生じる」ことから、本論文では、この個別的な体験の背景を知り、その構造を取り出すことを目的とする。

インタビューで語られた内容は、Bさんの個人的な体験である。そのため、本研究は、現象学的記述研究としてあらかじめ分析の理論や枠組みを提示して

いない。得られたデータは逐語に起こし、繰り返して聞き、繰り返して読むことで、患者の体験に接近するよう努めた。分析は、松葉ら（2014）の『現象学的看護研究 理論と分析の実際』を参考に、トランスクリプトを作成して分析した。看護または臨床哲学を専攻する3名で内容を確認し、最終的に読み取りに違和感がないかを本人に確認してもらうことで質を担保した。

## 2. 祝い熨斗の菓子箱

これまでの老衰死の経験に関する質問に対して、Bさんは悩むことも迷うこともなく、90歳代の母親を同居していた娘が看取ったことを語ってくださった。インタビューでは、母親が亡くなったことに対して、娘が「お祝い」を持参するという行動の希少性が特徴的である。それは、「死」と「祝い」という常識では結びつきにくい2つの語句が1つの文章に存在している様であり、語りに注目して特徴的な表現や文脈に注意を払いながら意味を探っていく。

M（筆者）：これまでの老衰死のご体験で印象に残っていることをお話してください。

B： 亡くなった後1ヶ月くらい。いや1ヶ月もしないうちに（娘が訪問看護ステーションに）ご挨拶にこられて。「ふざけてると思われるかもしれないけれど、私は、あの、これをお礼に持ってきましたよ」と。（その）菓子箱にはお祝いの熨斗がつけてあったので。

「あのこれふざけている訳ではないんですよ、でも集まってきた兄弟が家で（母親を）看取った私のことを褒めてくれた。それと私に多大な迷惑をかけずにギリギリまで（介護）サービスを使って最後を締め括った母が天晴れだったということをみんなが褒めてくれた。だから、まあ最後の最期まで生き方としてすごい母だったなあと思えるのと、その生ききった事のお祝いなんです」と。

こんなふうに思える人ってすごいなあって私の中で。だって、祝

い熨斗ですし。

Bさんは、自由にお話してくださいという言葉を待っていたかのように、唐突に語りはじめる。Bさんの文脈には、主語は存在せず、語尾を明確にすることも少ない。また、語りを聞いている者の反応は関係なく続いていく。それは、例えば「娘さんがステーションに来られたのは亡くなった後1か月くらい」ではなく、「その娘さんがこう言ったんですよ」という聞かせるための語りでもない。聞いている者に何かを伝えるためではなく、頭で再現される当時の風景を、そのまま表現していくような語りがBさんの特徴である。

在宅医療において、利用者が亡くなった後にその家族が挨拶のために訪問看護ステーションを訪れなければならない理由はない。とすれば、祝い熨斗の菓子箱を持ってくるという行為は、娘の主体性により行なわれた行為である。それは「亡くなった後1か月くらい、いや1か月もしないうちに」であり、娘にとって、葬儀や挨拶など母親が亡くなった後の行程が一段落して、さまざまな思いを巡らせる時期であったのだろうか。母親と娘は2人暮らしであったため、娘は単身生活へと変化している。母親のいない日常は次第に娘の日常となり、母親のことを知っている人と語りたくなる時期であるかもしれない。娘にとってBさんとの関係は、母親の死とともに終了するのではなく、亡くなった後の生活の中にも存在しているのである。

娘は、訪問した理由を「お礼に来ました」と伝えている。そして、菓子箱を前にして「ふざけてると思われるかもしれないけれど」と前置きしており、祝いの熨斗が「死」に対する社会通念でないことを理解している。その表現は2回用いられており、「死」を「祝う」ことの希少性は強調されている。Bさんはその「ふざけているかもしれないけれど」という言葉を語りながら、何かしら楽しそうな表情を浮かべている。この場面で、わたしはこれまでの老衰死のご体験で印象に残っていることについて質問しており、この娘とのやりとりが前置きなく唐突に語られたことから、「死」を「祝う」という行為が印象に残っており、Bさんもその希少性を理解している。

M：娘さんがこられたことはどうでしたか？

B：いえ、別に。その時（母親が亡くなった時）のことをたくさん話して。  
どんな感じ？ 普通に普通で。

上記はインタビュー後に本人に確認した時の返答である。

地域と宗派により多少異なることもあるが、日本の伝統的な慣習での祝い熨斗は、結婚・出産・長寿・快気・開店の時に用いられる。亡くなった時には忌中や忌引きといった言葉が用いられ、「忌」とは、日本における禁忌の意味がある。ひとが亡くなることを忌み嫌う日本社会に生活しつつ、死を祝う娘と、それを楽しそうに語る B さん。それは「普通に普通で」であり、特別なことではない。その普通について、さらに B さんの語りから探っていく。

### 3-1. こういう最期を迎えられたら幸せ

M：娘さんは？

B：なんかその、うん。あの、結構（性格が）サバサバして、ポンポンと言う人なんですけど。すごく愛情深いなあと。あんまりそう、べたべたした優しさはなかったんだけど、すごい。「自分が（会社に）勤めている間（母親は）毎日お弁当を作ってくれて。今度は私が見る番だ」と言われてたんですね。うん。こういう最期を迎えられたというのは、それは幸せだったんでしょうね。

M：こういう最期とは？

B：あの（母親と娘さんは）一緒に住んでこられて、ずっと。（看護師は）家族さんと関わっていくでしょ。そのプロセスを。家族さんが看とるために必要な情報を提供し、家族さんがやっていることを承認し、娘さんの気持ちを強化していくというか。サポートしていくっていうことをしないと（在宅での看取りの気持ちは揺れる）。いくら本人の希望があっても叶わない時があるんですね、家族はぐらつくので。初めての体験で。そういう意味では娘さんの気持ちが納得いくというところにはずいぶん自分なりに意図的に関わって（きました）。これでいいとか、こういうものだよとか、これでいいんだよ一と言う事で娘さん

のやっていることを承認したり。で、(お母さんは) うまく年とって  
ってるよと、体重の変化も見せる。そういうところがあると、その長  
いプロセスの中で(このままで) 大丈夫かなと思っている気持ちがち  
よっと強化されていくと言うか。(娘さんがこのまま在宅で) 大丈夫だ  
なという気持ちになって最期まで落ち着いておれたのかな。

この場面でわたしは、娘さんについて方向を定めずに質問している。それ  
に対し、Bさんは「サバサバして」「ポンポンと言う人」「べたべたした優しさは  
ない」、と娘の性格を語り、しかし、その状況を想起しながら「すごく愛情深い」  
と語る。ここでの愛情深さとは、母親と娘とのべたべたとした親密性のよう  
なものではない。Bさんは娘の「サバサバした」性格を理解し、娘が無理せず母  
親と過ごしている様子を愛情深いと語っている。そして、語りは娘の性格の話  
から、突然「こういう最期を迎えられたというのは、それは幸せだった」とつ  
ながっていく。

こういう最期とは、「娘さんの気持ちが納得いく」ことであり、「(このままで)  
大丈夫かなと思っている気持ちが強化され」ながら娘が介護することであり、  
「うまく年をとってってるよ」と言われながら母親が介護されることである。  
それらのことによって、娘は「(在宅で) 大丈夫だなという気持ち」を持つこと  
ができ、最期まで落ち着いて過ごしている。

Bさんは母親と娘に意図的に関わり、結果として母親と娘は「こういう最期  
を迎える」ことができている。その意図的な関わりのひとつは、看取りの中で  
起こる身体的な変化について、娘に情報を提供することである。田中(2016)  
は、「皮肉にも病院で寝たきりで何年も過ごすお年寄りの姿が当たり前になり  
すぎていた。(中略) 死の断片的なイメージばかりが先行して、死そのものにつ  
いて確かな知識も実感もないまま日本人は現代を生きているということなのだ  
ろう。ひとが老衰で亡くなっていく過程を具体的には知らない」と述べており、  
家族が老衰死に立ち会うことは稀なことである。また、死の立ち会いはその人  
との関係性によって異なることから、死に数回立ち会う機会があってもそれ自  
体は常に初めての体験のように感じ、「気持ちがぐらつく」ことから在宅看取り  
にはサポートが必要である。Bさんにとって老衰死を支援することは、母親が

死に向かうプロセスを整理しながら傍にすることであり、最期まで母親と娘が落ち着いていられるようにすることである。

もうひとつの意図的な関わりは、娘が行っている介護を承認し、在宅で看取るという気持ちを強化していることである。在宅で介護する者は、「これでよい」と思いながらも気持ちは常にぐらついている（前原 2016）。老衰する身体は回復過程になく、その進行する機能低下は生活の中で折に触れて露呈し、その生活に付き添う娘に恐れを感じさせる変化でもある。その結果として、Bさんの「こういう最期」は、「それは幸せだったんでしょね」とつながっていく。その「幸せ」な「最期」とは、介護する娘が母親の身体的な変化を知りながら、介護の方法や方向性が専門職によって承認され、在宅で看取りたいという気持ちが強化されながら在宅で看取ることができることであり、最期にむけて準備して、慌てず傍にいられることである。Bさんの存在によって母親はこういう幸せな最期を迎えることができ、娘は幸せな最期の看取りを迎えることができている。Bさんにとって老衰死を看取することは「こういう幸せな最期」を見届けることであり、そのために人々の気持ちの強化を支援することである。

### 3-2、幸せな死があるとしたら老衰死

M： 幸せな死があるとしたら老衰死って言われていましたが？

B： （母親の）最期の時にちょうどたまたま（夜の）当番だったので。

夜 8

時ぐらい（娘さんに）に呼ばれて訪問して。まだその時は「今晚という感じ」ではなかったんで（帰りました）。次に 11 時ぐらいに呼ばれたときは、本当にあの下顎呼吸<sup>4</sup>になっていたんで、もう今晚中かなと思って。

もう家に帰ってもすぐに呼ばれたらと思って、娘さんといろいろお母さんの思い出話をしている。「母は寝たきり介護の辛さを味わわずに今逝こうとしている」とか。けれど、娘さんもひとりで弱っていく母親を見ているのがとても怖いという思いがあったみたいで。話している中で、どんどん血圧も下がって呼吸も変化していったので一緒に看



取りをすることになったんです。

ふと、「お亡くなりになったようですよ」と言うと、その。(娘は)「自分 1 人だったら最期にもうちょっと慌てたかもしれないけど」「自分が選択しながらお母さんの介護をね、いろいろ選んで相談しながらやってきたけど、それがこういう最期を迎えられたと言うのはそれは幸せだったんでしょね」と (娘は言った)。

(わたしは)「良い介護をされましたね」と言って。

M: そのことは B さんにとってどうでしたか?

B: ほんとに良い介護をされたなあっと。(娘さんは) すごいわ。

この場面は、母親の傍らで娘と B さんが母親を看取る場面である。この場面では、2 つのことが語りから省かれている。

1 つめは B さん自身の感情である。B さんは時間経過に沿って想起しながら語りを進め、B さんが娘に呼ばれたことや、まだ今夜ではないと判断したことは事実として語りに含まれる。しかし、「私はどのように感じた」という B さんの感情は文脈から読み取れない。B さんが語りから省かれるのは、看護師はあくまで支援者であり黒子のような存在ということであろう。そんな B さんが登場する場面が、「良い介護をされましたね」である。母親の臨終の場面において、二人にはまったく慌てた感じが無い。B さんは「もう今晚中かなと思って」と母親の状態を判断し、「(娘に) 怖いという思いがあったみたいなので」と娘の心情から傍に居ることを決めている。看護師は、状況をその場で判断することが求められ、その経験に応じて判断でき、その判断に基づいて自然体でその場に応じた立ち居振る舞いができるようになることから、この状況で B さんがとった母親の看取りを一緒に行うという行動は、自然な行動である。そして、「良い介護をされましたね」も同様に自然体でその場に応じた立ち居振る舞いとしての言葉である。B さんは、母親の看取りの場面に自然体で存在するのである。

また、省かれている 2 つ目のものは時間経過である。ひとの最期は、息が止まっている時間が少しずつ長くなり、しかし突然大きな呼吸をして、家族を驚かせることがしばしばある。そして、呼吸が完全に停止して息を吹き返すこと

がない状態まで、かなりの時間を要するが、この場面でそれらの経過は一切語られず、死の過程を感じさせない。病院で死を迎えた患者のカルテには、何時まで血圧が正常であったのか、1 分間の呼吸数、モニターによる心拍数、体温などが時間経過に沿って一覧表に記録され、死に至る変化は明確である。しかし、母親は娘と B さんが話している中で「ふと」亡くなっている。老衰は連続した変化であるが、老衰死は完成系であり途中がない。B さんは「ふと、お亡くなりになる」という表現は、母親が温かさを残したまま生を完成させたことを感じさせる。

B さんが語った「こういう最期」とは、死にゆく母親の傍らで、娘が思い出を語りながら落ち着いた時間を過ごせたことであり、母親の最期をともに過ごしながら母親の生活を支援して納得が得られたことであり、母親が「ふと亡くなる」ように穏やかに死を迎えられたことである。それらすべてが、こういう幸せな最期につながっている。

この他の場面においても、B さん自身の気持ちは表出されないことから、改めて「B さんにとって」という言葉を用いて質問を追加した。しかし、B さんは状況を反芻して、「ほんとに良い介護をされなあゝ」と娘の行動を想起し語り閉めるのである。B さんは確かにその場面に存在する登場人物であるが、B さんにとって看取りの主役は亡くなる母親とその娘である。B さんにとって看取りとは、そういうものなのであろう。

#### 4-1. 生ききる

B さんは語りの中で、「生ききる」と「看取りきる」という表現を繰り返し用いている。そのため、ここでは B さんの語りから「生ききる」という言葉を取り出して、質問を重ねていく。

M: 「生ききる」という言葉が使われていましたが。

B: もう本当に。自然なこととして本人の持っている力を振り絞って最後まで生きた事。ひとに幸せな死があるとすれば、それは老衰死じゃないかなって思うんです。娘さんとも「お母さんは生ききったねえ」って（話

した)。老衰死は生ききったと言うことですよ。自分の力を最大限使  
って。

老衰はあまり悲観的に伝えたりしない方がいいんじゃないかなって（思  
う）。人は絶対死ぬんだから。（老衰死は）自分の残っている細胞で生き  
ることを、生きるという生物としての営みを最後まで遂げたわけでしょ  
う。生ききったと言うか本当に、本人も淡々としていたんですよ。こう、  
あるがままを受け入れていると言う感じで。食べなくなったときに、「ど  
うしましょう、病院行きますか？」と言った時も「いや、これで」とお  
っしゃるだけで。「今、辛いことありますか」と聞いても「いや、大丈夫」  
って。年をとったことも、ほんとあるがままを受け止めて自然にしてい  
らっしゃると言うか。その姿が多分娘さんにとっては生ききったと言う  
風に感じられたんじゃないかな。

Bさんの語りには、「生ききる」という表現がたびたび登場する。その内容は  
「力を最大限振り絞る」ことであり、「残っている細胞で生きること」であり、  
また「生物としての営みを最後まで遂げること」である。「生ききる」とは、「生  
きる」と「きる」という2つの動詞から構成されており、生きることをやり遂  
げる、生きることを完了するといった意味を持つ。それは単に「生きる」こと  
ではなく、日常的に起きている細胞の生と死を卓越して最後まで生きることな  
のであろう。この「生ききる」という言葉は辞書には存在せず、老衰死に寄り  
添ったBさんの感覚から用いられた表現であろう。ひとは必ず死に至るとBさ  
んは語っており、その死には「生きた人」と「生ききった人」が存在するので  
ある。

そして、Bさんは語りの途中で「老衰死は生ききったと言うことですよ」と  
「～よね」と語尾をつけてその内容を確認し強調している。インタビュアーは  
同意も否定もしないが、Bさんは語り続ける。老衰死と生ききることは結ばれ  
ており、それがBさんの老衰死の捉え方である。看護師歴40年を超えるBさ  
んは数々の看取りを体験しており、ひとは「絶対死ぬ」存在である。それでも  
「ひとに幸せな死があるとすれば、それは老衰死じゃないかな」と語っており、  
幸せでない死が存在すること想像させられる。今回のインタビューでの語り

は、娘が菓子箱を持ってきたことが中心で、母親の様子は語られない。しかし、我々は娘と B さんの対話を通して、「生ききった母親」、「幸せな死を迎えた母親」としてその存在を知るのである。

B さんは、自己紹介で「患者との関わりから、生物としての仕組みがわかって、消えていくのちをサポートしたいと思った」と語り、生物の仕組みとして細胞の寿命や生命の有限性から死を捉えている。どんなに力を振り絞っても、ひとの細胞が死ぬことは必然で、その結果として生命体の死が起こることを実感しており、そのことは「老衰はあまり悲観的に伝えたりしないほうがいいんじゃないのかな」という言葉につながり、老衰が一般的に悲観的に伝わっていることを感じさせる。「死」そのものは、生きることと同様に生物としての営みであり、最期まで力を振り絞ることは、生きることを達成するための一つの目標であり、それが老衰死となっている。

さらに語りは続き、「力を最大限振り絞って」最期の時を生きていた母親を B さんは「生ききったというか、本当に淡々としていた」と言い換えている。「自分の力をふりしぼるなど、自然なこと」として生ききる様は、老衰死するためのエネルギーを感じさせる。しかし、それは本当に淡々と行われるのである。母親の老衰から死への過程は、「エネルギーを使い果たす」ことが「淡々と」行われる。そのように矛盾しながら、「生」の対として「死」があるのではなく、残っている細胞すべての力を振り絞って、着実に死に向かっていくのである。つまり、生と死は分離されたものではなく、一方向へと流れていく過程なのである。

#### 4-2. 看取りきる

B さんは、「生ききる」という表現だけでなく「看取りきる」という表現もたびたび用いる。わたしは、高齢者に関する講演会などで「生ききる」という言葉をしばしば聞く機会があった。しかし、「看取りきる」という言葉を聞いたのは、B さんが初めてである。そこで、B さんの「看取りきる」ことについて考える。

M：前回、看取りきるという言葉をお聞きしましたが。

B：あの、家で看取るからといって買い物も行かずにずっと看ているのではなくって。意外と放って買い物に行ったり出かけたりしておられた。あの本当にこう、そういう普通にお母さんの家族だったな、っと。はい。

M：それは？

B：お母さんはもう動き回るという事はなく、介助がなければ起き上がれないので。それでも、やっぱり夜寝ていても気になるのは気になっているわけですから。やっぱり娘さんも歳をとっていくので、(お母さんを)抱えて(場所を)移したりというのは負担になってくるので。そういう部分では自分がストレスを溜めない暮らしが大事だとおっしゃっていました。(お母さんは)ショートステイは好きではなかったんですよ。でも娘さんが「私のために行ってね」って頼んでいました。で、娘さんはお友達と出かけてきて楽しい時間を過ごしてきて、またお母さんの世話をするという。お母さんは(ショートステイに)行きたくないとはおっしゃっていたんです。でも、「ごめんなさい行ってね」って。そこはすごく(娘の意思は)はっきりしていて。自分(娘)がストレスを溜めないことが母をよい介護ができると思っていらっしゃるから、「ごめんなさい行って」「ごめん行って」って。「お母さんのために行くんじゃない、私のために行って」って言えることがすごいなって。

看取りきるとは、生ききると同様に「看取る」と「きる」という2つの動詞から構成されており、単に看取ることではなく、看取ることをやり遂げる、看取ることを完了するといった意味を持つ。しかし、ここでは看取るからといってずっと傍で看ているのではない娘の様子が語られる。娘は母を家に残して買い物に出かける。しかし、そこには「意外と」や「放って」という言葉がついていることから、一般に看取るということは1日中傍に在ることであり、買い物に行ってもすぐに帰ってくるような状況を想像させる。

「買い物も」の「も」は複数形である。つまり、娘が家にいない状況は買い物だけではない。娘は買い物といった母との日常生活を維持する用事に外出するだけでなく、「友達と出かけて楽しい時間」のために母親を「放って」過ごし、

そのように娘が出かけていく姿を想起しながら、Bさんは「普通にお母さんの家族だったな」と語っている。

普通にお母さんの家族ということとは、どういうことか。わたしは「看取りきる」ということに焦点をあてて質問し、Bさんは「そういう普通にお母さんの家族だったな」と語りを絞めている。母親の身体は「もう動き回るといふことはなく」「介護がなければ起き上がれない」ほど衰弱しており、徘徊や転倒の可能性は考えにくく、傍にずっといることが必要な状況ではない。しかし、娘にとって、「それでも」「やはり」「気になるのは気になっているわけ」であり、娘の日常生活すべてにおいて母親は存在している。ここでの「それでも」「やはり」は状況の強化である。娘は母親を気にしながら「それでも」外出し、「やはり」常に気にしている。それが二人の日常生活における普通であり、「普通の家族」となるのである。

次の場面は、先に続く場面である。質問を挟むことなく、Bさんの語りは続く。

B：(母親が亡くなった) あとからきた兄弟たちが娘さんを褒めてくれたという事はすごくよかったな一って。あそこでその兄弟でちょっとでも責める人がいると、その気持ちがもうガタガタと崩れていくのを兄弟たちがみんなですり上げた。みんなで、子どもたちがお母さんを94歳まで生きて天晴れだったと言うことで、(娘に)無茶言わなかったということ、ずっとおっしゃって。それがすごく印象に(残っている)。まあこんなふうに94歳まで生きた事をお祝いできる。そして看取った家族を褒めあえる関係はその家の歴史の中で作られてきたんだと思うけど、そこを手助けするということに、その、看護とか介護とか社会資源が関わることができる、まあ自宅で穏やかに最期を迎えることができる。

この場面は母親の死後の、「普通に家族であった」娘と兄弟の様子が語られている。兄弟は母親が94歳で亡くなったことではなく、94歳まで生きたことを祝い、母親が無茶を言わず娘に迷惑をかけなかったことを褒めている。Bさん

はその関係を「その家の歴史の中で作られた関係」としながら、そこに社会資源として「手助け」することが必要であると語り、そのことによって介護する家族の気持ちがガタガタと崩れていかないことが、「すごくよかったな」なのである。

## 5. 生きることと看取りきること

次の場面はインタビューの最後に、語りつくしたか確認するために質問した場面である。

M: Bさんから伝えたいことや話し残したことはありますか？

B: ...。ひとはもう本当に自然なこととして本人の持っている力を振り絞って最後まで生きる事と、その場面をちゃんと受け止めながら（生きること）。だから生の最後には死があるという（こと）。それが、娘さんとしては看取りきったという（こと）。要はお母さんに過剰な医療とかではなくて、自分も落ち着いてお母さんの変化を認めていたし、本人は本人で淡々ところ、あるがままの状態で不安がる様子もなく過ごしておられた。それが（母親が）生きることと娘さんが看取りきることをつなげたのではないかと思うんですけどね。生と死というのは常につながってますよね、あいだがない。

M: 自然なこととは、そういう？

B: はい。みんな本人（母親）が嫌がると、自分（娘さん）がストレスを受けながらも躊躇するじゃないですか。それがなかったというのがすごい。それはもう本当にある程度割り切った関係と言うか、普通に現実を見ながら介護しておられたという気がします。だからじっくりと（娘は）自分のペースも保ちながら、お母さんに振り回されていないですよね。それがこう、一緒になって（看取りが）できたっていうのが（すごい）。

ここでも娘の「普通に現実をみながら介護」している状況として、母親を放

って買い物や友達と外出すること、嫌がる母親にショートステイにいてもらうよう頼むことが挙げられ、それによって母親は嫌がりながらもショートステイに行く。娘は母親が嫌がっていることを知っているにも拘わらず、「割り切って」「躊躇なく」依頼し、それは執行され、母親はそれを嫌がりながら「淡々と」受け入れるのである。

しかし、ここには、矛盾がある。娘は割り切って躊躇することなく、「お母さんのためにではなく、わたしのために行って」と母親に依頼しているが、その依頼には「ごめんなさい」「ごめん」が付いており、さらに、娘は自分がストレスを溜めずにいることで、母親に「良い介護ができる」と思っている。娘は、自分のためと言いながら、母親に良い介護をすることを考え、母親に謝りながらも自分の時間を過ごす。娘が自分の時間を過ごすことは、どちらかのための行為ではなく、双方にとって良い状況を引き起こす「自然なこと」につながっている。

ここでBさんが「みんな」と言っているのは、Bさんが関わってきた他の家族のことである。「本人が嫌がると、介護者はストレスを受けながらもショートステイに行くことを躊躇する」という一般的な介護家族の様子が語られている。看取ることに伴う介護者の生活の制約や犠牲と葛藤といった社会背景が描かれ、介護される本人を主とした家族の在り様が示されている。しかし、娘は「現実をみながら介護」することによって、娘と母親は「普通のお母さんの家族」となり、母親の「生」と「死」はつながり、そして「生きること」と「看取りること」がつながっていく。

ここでは、嫌がる母親も謝る娘も同様に普通である。それは、Bさんの「普通」であって一般的ではない。「もう本当にある程度割り切ったというか普通に現実をみながら」ということは、「じっくりと自分のペースも保ちながら」「お母さんに振り回されていない」ことであり、母親と娘の普通である。そして、「死」を「祝う」こともまた一般論ではないが普通なのである。

## おわりに ーBさんにとって老衰死とは

Bさんの役割は、娘に情報を提供し、娘の介護を承認して介護力を強化し、



看取りの瞬間に立ち会い、母親の死という恐怖から娘を解放したことであった。さらに、亡くなった後にも娘が語れる存在であることである。Bさんの関わりによって、母親は娘に迷惑をかけなかった「天晴な母親」となり、その結果、母親の死は忌むべきものから、祝うべきものへと変化していく。そのすべては特別なことではなく、普通のこととして行われる。老衰死の原点となった石飛氏は『平穏死のすすめ』の中で、「これまで私たちは、死を、いつかは来るものと知っていましたが、怖いと思っていました。“怖い”というのは“よくないこと”を想像するからです。しかし、われわれは自然死を素直に受け入れればそこには平穏死があることを知りました」と述べている。また、「おだやかな最期を看取ったとき、見送られた者も見送った者もやっとなほつとしたと思う。両者の“安堵感”があり、お互いが精いっぱい生きてきたことの証ではないか」と老衰死が看取る者と看取られる者に安堵感を与え、互いの生の証となることを述べている。

Bさんの語りから見えてきたことは、老衰死を看取るという体験が個人的な体験でありながら、特別なことではないということである。Bさんは、死を祝った娘を「すごい」と語っており、そのすごさは「その家の歴史の中で作られた関係」からくるものであり、そこにBさんは存在しない。Bさんにとって老衰死は家族のものであり、その家族がどのように捉えているかが重要である。その在り様に正解はなく、固定観念を通して見つめていないことから、老衰による死への営みは普通のことであり、死を祝うことができた家族も、祝う死を支援できたBさんも普通となっている。もうひとつは、老衰死の看取りは「死」をもって完結しないということである。老衰死の看取りは、母親の生を支援するとともに、娘の生も支援していた。そして、老衰死を経て、その娘の未来の生も支援していくこととなっている。Bさんにとって老衰死は普通に生き、普通に逝く過程であり、その意識的な関わりは、その「普通」が、普通に行われるために傍にいるということであろう。

## 引用・参考文献

- 石飛幸三：「平穏死」のすすめ 口から食べられなくなったらどうしますか，講談社，2010年，p.190.
- 田中奈保美：枯れるように死にたい 「老衰死」ができないわけ，新潮文庫，2016，
- 前原なおみ：看護師にとって老衰死とはどのようなものか-看護師 A さんの語りから，『臨床哲学』第 18 号，大阪大学大学院文学研究科，2016 年，p.83-100.
- 松葉祥一・西村ユミ：現象学的看護研究 理論と分析の実際，医学書院，2014.
- 村上靖彦：摘便とお花見 看護の語りの現象学.医学書院. 2013.

## 注

1. 老衰死とは、高齢の方で死因と特定できる病気がなく、加齢に伴って自然に生を閉じる亡くなりかたのことを言う。2016年の1年間に日本で老衰死された方は、7万5千人であり、今後も増加が予測されている。
2. 看取りを、箕岡は「無益な延命治療をせずに、自然の過程で死にゆく高齢者を見守るケアをすること」と定義している。
3. パトリシア・ベナーの臨床看護実践の5段階の技能習得レベル第4段階(中堅レベル)は、援助をその場の一時的な視点ではなく、全体的な視点でとらえることができ、格率を基に実践を行える看護師のことを示す。格率とは行為や論理の規則を意味し、状況の意味を認識し、経験や状況から判断して実践できるレベルである。考慮する選択肢を少数に絞り、問題の核心部分に焦点を当て、目の前の状況が重要なものか、あまり重要でないものか、即座に判断が可能なレベルである。
4. 下顎呼吸は、臨終間にみられる呼吸で、呼吸のたびに顎で喘ぐように見える努力性呼吸の一つである。呼吸をするのに全エネルギーを消費している状態で、この呼吸がみられると数時間から数日で死に至ることが多い。